

平成30年度 第97回全国高等学校サッカー選手権大会埼玉県大会 総評

「浦和南高校 17年ぶり9度目の栄冠」

報告者：高体連技術委員 越ヶ谷高校 野木 悟志

平成30年度第97回全国高等学校サッカー選手権大会埼玉県大会が8月23日から11月18日の期間に開催された（一次予選8月23日～8月29日、二次予選トーナメント10月13日～11月18日）。二次予選トーナメントは、U18埼玉県リーグS1・S2に所属している23校（Bチームの7チームは除く）と総体県予選でベスト8の成績を残した立教新座高校、そして一次予選を勝ち上がってきた28校の計52校によるトーナメント方式で実施された。優勝は浦和南高校、準優勝に昌平高校、3位に浦和東高校と成徳深谷高校という結果となった。浦和南高校は17年ぶり9度目の優勝で、平成最後の選手権大会への切符をつかんだ。

優勝した浦和南は、決勝を含めた4試合全てにおいて1点差で勝利を収め、接戦をものにする無類の勝負強さを発揮したチームであった。各選手が対戦相手に応じた戦い方や役割を理解し、強いメンタリティーと高い集中力を持ってタフに粘り強く戦うことで劣勢の試合展開でも勝利をつかむことにつなげていった。今大会では4試合で5得点、許した失点は決勝戦での1失点のみであり、堅守が光った戦いぶりであった。DFラインからFWまでの距離をコンパクトに保ち、素早いボールホルダーへの寄せと球際の強さで相手選手の自由を奪うことがよくできていた。特に、アンカーとして相手の攻撃の芽を摘む役割を果たしたゲームキャプテン⑦鹿又、空中戦の高さと対人の強さのある両CB⑩庄司と⑤相馬、守備範囲の広いGK⑯正野といったセンターラインの選手の活躍が守備に安定感をもたらしていた。攻撃力のある昌平との決勝戦では、守備陣形をコンパクトに整え、球際や対人に強く激しい守備で相手選手にスペースと時間を与えなかったことで、昌平の攻撃のストロングポイント（ポゼッションサッカー）を上手く消すことができていた。攻撃は、1トップ⑮佐藤をターゲットにロングボールを配給してタメを作り、2列目に配置したMF⑩大坂を經由しながらサイドを起点に攻撃を仕掛けた。⑩大坂は攻撃の中心選手として好機を演出することに加え、自らも3得点を挙げる活躍を見せ、優勝に大いに貢献した。また、空中戦の強さを生かしたセットプレーやロングスローは浦和南の攻撃の大きな武器であった。決勝戦での同点ゴールはCKから獲得したPKで奪い、逆転ゴールはFKからゴール前の混戦の中で奪った得点であったことから得意とするセットプレーが十分に機能した試合内容であった。決勝戦に駒を進めるまでの厳しく緊張感のある戦いを経験していく中で、選手たちがより一層たくましく成長し、チームとしても成熟度や完成度が高まっていった。その結果、総体県予選の決勝戦で敗れた昌平に見事にリベンジを果たし、全国大会への出場を決めることにつながった。

準優勝した昌平は、今夏の全国高校総体で3位に輝いた実績と経験を兼ね備えたチームであった。攻撃は、チーム全体でボールを動かしながら前線の選手が流動的かつ連動した動きでボールを引き出し、複数の選手が関わりながら中央やサイドを崩し、多彩な攻撃を展開し

た。J1川崎内定で注目度が高かったボランチ⑧原田は、推進力のあるドリブルや精度の高いキックから多くの決定機を演出した。⑧原田が攻撃的なポジションで自由にプレーができるのは、ダブルボランチを組む⑥丸山の存在が大きかったと言える。⑥丸山は守備的なポジションで常に全体のバランスを意識しながらプレーできる昌平の中盤には欠かせない選手であった。また、昨年度の選手権県予選決勝戦で決勝点を決め、チームを優勝に導いたLMF⑩森田は、今大会3得点を挙げるなど持ち前の得点力の高さを発揮し、攻撃を牽引した。決勝戦では、浦和南の中央を厚くした組織的な守備の前にパスをテンポよく繋ぐ昌平本来の攻撃的なポゼッションサッカーが出しきれず、攻撃のリズムをつかみきれなかった。守備については、1年生からレギュラーとして活躍し経験豊富なCB⑤関根がDFラインを統率し、コレクティブな守備で相手に試合の主導権を握らせなかった。攻撃から守備の切り替えが早く、即座にボールを奪い返して、攻撃につなげている場面も多く見られた。今夏の全国高校総体では、5試合で9失点と守備面での課題が浮き彫りになっていたが、今大会では4試合で3失点を喫したものの、崩されての失点はなかったことから考えると、守備面での課題が改善された部分が見られた。ただ、結果として見ると決勝戦での複数失点は悔やまれるところであり、「守備」が勝敗を分けた大きな要因の一つであったことは間違いないであろう。毎年のように安定した結果を出し続け、優勝候補として他チームから研究・分析される中での準優勝は立派な成績であった。今大会での悔しさを糧に、個とチームの両方でさらなるレベルアップを図っていく昌平の今後の飛躍に期待したい。

3位の浦和東は、攻守の切り替えの早さをベースに豊富な運動量で攻守にわたってアグレッシブなプレーが特徴的なチームであった。攻守の要であるゲームキャプテン⑥中野を中心に長短織り交ぜたパスで攻撃を組み立て、SBが積極的に攻撃に関わることで数的優位な状況を意図的に作り出し、サイドを起点に迫力ある攻撃を仕掛けた。2回戦から3試合連続ゴールで攻撃陣を引っ張り、チームを準決勝進出へ導いたFW⑩小川は得点感覚の高さを発揮し、エースとして輝きを放った。守備は各選手の守備意識が高く、プレスを掛け始める位置やボールの奪い所が選手間で共有されており、チームで意図的にボールを奪うことが徹底されていた。準決勝の昌平戦では敗れはしたものの、試合序盤から積極的にボールホルダーへ連続したプレスを掛け、相手選手の自由を奪おうとする守備のコンセプトがはっきり見ることができた好試合であった。今回の敗戦を機に、より一層成長していく浦和東の今後の活躍に注目していきたい。

同じく3位の成徳深谷は、前線の選手の空中戦の強さや質の高いランニングを生かした縦に速い攻撃と、ハードワークや球際の強さで圧力をかけ続ける堅い守備が持ち味のチームであった。FW⑩戸澤をターゲットにロングボールを配給して相手コートに侵入し、セカンドボールを拾うことでサイドや中央からスピーディーかつ力強い攻めで相手ゴールに迫った。また、前線へのロングボールを徹底することで多くのCKやロングスローを獲得しようとする狙い通りの展開がよくできていた。準々決勝の市立浦和戦では、CK9本、ロングスロー20本以上という数字に成徳深谷の戦い方やストロングポイントがよく表れており、決勝点

も得意とするロングスローから奪い、初の4強入りを決めた試合となった。準決勝では、優勝した浦和南に決定機で上回る互角以上の戦いを見せたが、一瞬の隙を突かれ失点を喫し涙を吞んだ。今年のチームはキャプテン⑧佐藤を中心にチームが一つにまとまり、新人大会、関東大会県予選の県内2冠、総体県予選3位、そして選手権県予選3位と輝かしい成績を収めた。成徳深谷にとって新しい歴史を作ったチームであるとともに、今季の埼玉県の高校サッカー界を牽引したチームの一つであったと言える。

大会全般を振り返ると、「自分たちのスタイルや戦い方を貫き通して戦うチーム」や「相手チームのストロングポイントを消すために意図的に戦い方を変えるチーム」、「試合のスコアや流れ、時間帯に応じて柔軟に戦い方を変えるチーム」など様々なチームが見られた。各チームが“勝つこと”から逆算して戦い方や戦術などのゲームプランを選択し戦ったことで、多くの好勝負が見られた大会となった。攻撃では、空中戦と球際に強い選手を前線に配置し、そこをターゲットに意図的にロングボールを多用しながら攻撃を仕掛けるチームが多かった。そういった傾向もあり、ロングスローやセットプレーからの得点も多かった。多くのチームでロングスローが投げられる選手や正確なキックが蹴れる選手、空中戦に強い選手がおり、ロングスローやセットプレーは大きな得点源であった。特に拮抗した試合になればなるほど、セットプレーが勝敗を分ける大きな要因になることから、多くのチームがセットプレーの練習に時間を費やしていることが窺えた。しかし、前線へのロングボールが増えることで攻撃が単調となり、相手守備者にはじき返されたり、前線の選手がキープしても2列目の関わりが遅く孤立していたりして、簡単にボールをロストしている場面も少なくなかった。ロングボールをより効果的な攻撃にするためには、ショートパスやミドルパスで相手を食いつかせたり、バックパスで一度相手DFラインを押し上げさせたりすることで、裏やサイドにスペースを作り出すことが重要である。精度の高い長短織り交ぜたパスと質の高いスペースへのランニングを駆使した攻撃が展開されていくことで、多くの決定機を作り出すことにつながっていく。守備については、上位に進出したチームは味方同士の距離感やバランスが良く、コンパクトな守備陣形で組織的に守り、相手に隙を与えない守備が徹底されていた。前線の選手がハイプレスを掛けることで相手選手の選択肢を限定させ、出てきたパスに対してインターセプトをしたり、前後で挟んでボールを奪ったりと良い場面が多く見られた。また、リスク管理への意識が高く、カウンター攻撃から得点を奪われる場面は少なかった。しかし、ロングスローやセットプレーによる失点が多かったのが課題として挙げられる。前述したように攻撃時のロングスローやセットプレーの精度が高まってきている一方で、それに十分に対応できる守備が構築されていないと感じた。まずは、ロングスローやセットプレーを与えないことが最も大切なことである。そのために不用意なファウルを減らすことやクリアの精度を高めることが不可欠である。次に、ロングスローやセットプレーになった場合、マークの確認やセカンドボールへの反応、ストーンを配置する位置、GKの守備範囲などを考え、良い準備をしておかなければならない。セットプレーからの得点と失点が増えている傾向がある中で、日頃の練習から攻守におけるセットプレーを確認し、質を高めていくことが重要

である。

最後に、浦和南には本大会までの限られた時間の中で最高の準備をし、チームの完成度をさらに高め、全国の舞台で好成績を残すことを期待し結びとする。